

オーダーメイド医療実現へ、遺伝情報3万人登録

患者一人ひとりの体質に合わせた医療（オーダーメイド医療）の臨床での実現に向け、国立国際医療センター（東京都新宿区）は7日から、外来・入院患者らの遺伝子情報などのデータベース作りに乗り出す。

同センターは2～3年後から実際の医療現場での治療、予防に活用していく方針。オーダーメイド医療では、東大医科学研究所を中心とするグループが薬の効果などの研究を始めており、実用化を目指した研究が拡大していきそうだ。

対象となるのは、糖尿病や高脂血症、心筋梗塞（こうそく）、脳梗塞、肝硬変、白内障、がんなど122疾患。7日からまず外来患者への説明を始め、29の全診療科で患者の了解を得て血液や尿を採取する。その上で病気との関連が疑われる遺伝子のタイプ、尿中のたんぱく質や脂肪などを分析する。

こうした遺伝子情報や臨床検査データなどをデータベースに登録する。3万人分の登録が目標としている。最も重要なのは遺伝子情報だ。遺伝子情報を調べると、個々人で少しずつ違う所があり、その違いによって薬の効果や副作用に違いが出る。この情報を知ることによって体質に合わせた治療や予防ができることになる。

同センターは、患者の追跡調査も行い、遺伝子情報などから得られた治療法、投薬量が適切かどうかを検証する。

東大医科研など14の研究機関と病院が2003年度から始めた「オーダーメイド医療実現化プロジェクト」（5年間）では、約30万人の遺伝子から薬の効果、副作用などを調べ、データベース化を目指している。これとは別に、東大医科研では、2種類の抗がん剤について、効き目を遺伝子レベルで予測し、使い分ける外来診療を行っている。

同センターは実際に医療現場で活用する段階では遺伝子情報はすべて匿名化する。同センター研究所の加藤規弘・遺伝子診断治療開発研究部長は「実用化

のめどが立てば、個人情報の保護を万全にして他の医療機関にもデータを提供したい」と話している。

(読売新聞) - 11月5日 15時44分更新